



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.136  
2015.1.1  
謹賀新年

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

### ● 第1回 ● 非歴史的な再構成の構え

加曾利B式土器(以下、加曾利B式と略)を解説するには二つの方法がある。一つは現在の到達点を仮想した研究の歩みとそれを裏付けるデータ検証を示す基礎研究に代表される**歴史的な選択構成法**である。本誌に連載された塚本師也による阿玉台式の解説が模範的であり、定義の限定性を示すためにも内部構造の静態的な記述が中心となる。

もう一つの方法は、歴史的な経緯の中で概念的選択的なモデル化に陥る展開に楔を打ち込むべく、推移的閉包を射程とする**日本先史土器の形成プロセス**の深耕を目指す、**土器型式の存立基盤を外部構造との動態的位相として記述する**立場である。加曾利B式と定義された内容が次に研究者には如何なるアプローチを求めているか、と問う立論は、人類活動の各種イベントを重視し、推移的閉包として加曾利B式と定義された既存内容以外との関係に注目するならば、**非歴史的な再構成を「土器社会論」として記述する「生態型式学」**の導出となる。

土器型式の内部構造を静態的に記述する場合は、土器型式制定の基礎となる直接的な出来事が研究の対象となり、研究の認知から現状認識までの型式学的な知識が蓄積される。然らば土器型式の存立基盤を外部構造との動態的位相として記述する場合にはどのような構えが求められるであろうか? 加曾利B式研究とは二つの方法を明示する所から始まる。

近代日本考古学の出発点とされるE.S.

モースによる大森貝塚の報告は、進化論の適用として科学的な静態的記述に優れ、そのモースに対し、ファーブルの昆虫記よろしく進化論へのアンチテーゼを展開した坪井正五郎の人類学は、動態的位相の記述が白眉である。

それは日本人の祖先を外国人のモースに垣間見られる進化論的好奇の対象とするのではなく、列島における石器時代遺跡の網羅的体系的な分析から「生態型式学」の総合化に進む「**コロボックル思考法**」を論理的に確立させ、「生活の有様を明にするのみならず、此人民と他の人民との関係、此の人民の行衛迄も明にせんとする」ための動態的位相の記述を目的とした**パブリック・アーケオロジー**の構え(記述項目は、身体装飾/衣服/冠り物/覆面/遮光器/飲み物/食ひ物/調理法/飲食法/竪穴/住居の工

事/室内の有様/器具/打製類/磨製類/利器以外の石器/石棒/凹み石/石皿/骨器/角器牙器/土器/容器/土製装飾品/土偶/土版/貝殻器/植物質器具/日常生活/漁業/鳥獣捕獲/他の食料採集/製造/美術/分業/貿易/交通/道路/運搬/人事/結論と具体的である)に尽きる。

モースも坪井正五郎も偶然とはいえ加曾利B式研究に多大な貢献をした。モースの関心の1つである突起・把手の形態に注目するならば、坪井正五郎は大森貝塚(第1図)と西ヶ原貝塚(第2図)の違いを認知し、異なる形態と認識できたはずであるが、同じ頃に椎塚貝塚と阿玉台貝塚が発掘され、薄手の「大森式」と厚手の「陸平式」という簡便な違いに注目が移り、西ヶ原貝塚で実践された形態学と彼の「**土器様式名称**」は未完のままで今日に至る。



▲第1図 モースによる大森貝塚の突起・把手



▲第2図 坪井正五郎による西ヶ原貝塚の把手の形状

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

#### 目次

■加曾利B式土器 非歴史的な再構成の構え(第1回) 鈴木正博 …1  
■考古学の履歴書 良き師・良き友に恵まれて(第19回) 渡辺 誠 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第129回) 新海和広 …3  
■考古学者の書棚 『洞窟の骨』 高橋一夫 …4

## 考古学の履歴書

## 良き師・良き友に恵まれて(第19回)

渡辺 誠

## 25. アンギン(編む布)のこと

アンギンというのは、編む布という言葉が長い歳月を経て落ち着いた言葉である。とにかく実物は国の重要民俗資料に指定されている越後アンギンとよばれる一群しかないし、編む布というのはいわば解釈にすぎない。それを分かりやすい言葉でということで、編む布と書くべきであると言われた先生もいたが、言葉の変遷と解釈とを混同させることはできないというのが、私の強く抵抗した論理であった。もちろん現在そんなことを言う人はいない。

さて私にとってなぜこのアンギンが問題になるかと言うと、トチの実のアク抜きとの関係にある。このアク抜きはその装置としての平たい箱状のものの中に、粉を入れ水を流すのであるが、その時、粉が下に流れ出ないようにサラシを敷き、長時間水を流し続けるのである。このサラシに相当するものとして、考古学的にまずアンギン注目されたのであるが、当時わかっていたアンギンは目が粗く、ヨコ糸はともかくタテ糸の間隔は1cmあり、これでは問題にならない。そこで向きを変えたりして2、3枚重ねたりしたのかとも考えたが、しっくりとはしなかった。しかも国の重要民俗資料に指定されている越後アンギンには、目の細かい実物はない。

その前にアンギンという言葉すら知っている考古学者は皆無であったことを指摘しておきたい。その上「東はサケ・マス、西はドングリ」などといった夢みたいな縄文文化論では、そのアク抜きの方法や設備についてはまったく考えられたこともなく、そもそもトチの実という木の実すら知られていなかったのである。知っていたのは福島が目黒吉明氏のみであった。

考古学と民俗学にまたがってアンギンを知っていたのは上原甲子郎氏だけだと教えて下さったのは、恩師の江坂輝弥先生である。新潟県山北町上山遺跡出土の足形圧痕土版の裏側にアンギン圧痕がみられ、民俗資料と同じものであることに上原氏は気づかれていたのである。そのことはすでに学生時代に御教示を頂いていて、京都時代には研究していたのであるが、名古屋に来てから、アク抜きとの関連において、さらに詳しく知る必要性に迫られてきたのである。

そして民俗資料の越後アンギンと関連する道具類の調査研究と、その蒐集保存に尽力してこられたのは、津南町の滝沢秀一先生である。それらの資料は現在十日町市立博物館に収納されている。先生に懇切丁寧に御教示頂いたのは大変ありがたいことであった。珍しい糸瓜などの野菜を頂いたりしたことも、妻の料理とともに今では懐かしい思い出である。

十日町市立博物館では阿部恭平氏にも大変お世話になったが、それはアンギンのことばかりにとどまらなかった。後に記すように、アンギンに密接に関連する漆の研究についても、重要なきっかけを作って頂いた。

しかし差し当たりの私の研究の焦点は、布目のつまり具合である。そして親友の高橋与右衛門氏から朗報がもたらされた。飛び上るほどうれしかった。満足のできるアンギンの出土している秋田県五城目町中山遺跡の発表要旨のコピーが、送付されてきたのである。

早速秋田県埋蔵文化財センターに高橋忠彦氏を訪ね、中山遺跡出土の待望のアンギンを拝見した。これは黒色で、長さ13.0cm、直径1.6cmでZ字状に強くねじられている。漆のまじりものを漉すために使われたからである。また、漆に守られて、腐らずに残ったのである。そして13.0cmの間にタテ糸は91本が確認され、その間隔は1.4mmで、ヨコ糸の間隔は0.8mmである。これは弥生時代に伝わった平織りの布と遜色はない。これで安心して水さらしを伴う食の研究に、集中できるようになったのである。

わが国でもっとも古いアンギンは、土器底部の圧痕にみられることから、縄文前期にさかのぼる。しかし中国ではさらに古く、早期併行の磁山文化にあることが『考古学報』に報告されている。そして名古屋大学での留学を終え南京大学に戻った熊海堂氏に案内してもらい、1994年に社会科学院を経て河北省文物研究所に伺い、その資料を見せて頂いた。直径約16cmの大きな平底全面にアンギンの圧痕がみられた。その上次の平織への移行を示唆する部分もあり、次の仰韶文化には完全に移行している。これが日本の弥生時代に伝わってくるのには3000年も後のことである。

それでもアンギンの圧痕は、弥生式土器にもみられる。それどころかアンギンそのものが中世の僧侶達にも着用されている。時宗ではこれを阿弥衣として『一遍上人絵詞伝』にも描かれているばかりでなく、現在でも私の調査では18着伝わっている。名古屋大学で定年を迎える前年に、時宗寺院にアンケート調査を実施した成果である。これについては文学部事務官佐藤友美氏からの大きな御協力があった。

| 略歴          |                                |
|-------------|--------------------------------|
| 昭和13年11月18日 | 福島県平市大町(現いわき市)に生まれる            |
| 昭和32年3月     | 福島県立磐城高校卒業                     |
| 昭和33年4月     | 慶應義塾大学文学部入学                    |
| 昭和43年3月     | 同上大学院博士課程修了                    |
| 昭和43年4月     | 古代学協会平安博物館勤務                   |
| 昭和54年8月     | 名古屋大学文学部助教授                    |
| 平成元年4月      | 同上教授                           |
| 平成14年3月     | 同上定年退職、同上名誉教授                  |
| 平成15年4月     | 山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで) |
| 平成18年7月     | 日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)          |

隔月連載です。今回は岡田淳子先生です。

## レイエッセイ

## マイ・フェイバレット・サイト 129

## 大湯環状列石 ～ 秋田県鹿角市

新海 和広

秋田県で最も有名な縄文時代の遺跡といえば、大湯環状列石(以下大湯)を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。

大湯は、縄文時代後期前葉～中葉にかけてつくられた、直径が約52mの万座と約44mの野中堂の2つの大規模環状列石

を中心とする祭祀関連遺跡。各環状列石を囲むように掘立柱建物跡があり、その外側には貯蔵穴を含む土坑や遺物廃棄域が同心円状に配置される。昭和59年～平成20年まで鹿角市教育委員会が行った調査により、上記のことが明らかになっている。

私と大湯との関わりは、現在勤めている秋田県教育庁文化財保護室に来てから多くなった。整備の委員会やイベントの他、大湯は世界文化遺産登録を進めている「北海道・北東北の縄文遺跡群」の構成資産でもあるため、それに係る会議なども多い。こういった様々な取組の中で、思い出深いものをご紹介します。

一つは、世界遺産登録推進シンポジウムのポスターに使う写真の撮影。万座と野中堂環状列石の中心と、それぞれの内帯と外帯の間に一つずつある日時計状組石の4か所が一直線に並び、その延長線上に夏至の陽が沈むことは、近年広く知られているところである。地元ではこの日に合わせ、夏至の日没を見る会も催されている。ポスターにどうしてもその日没の写真を使いたい。鹿角市教育委員会に撮影してもらえば良いものの、この目で日没を見たいという思いもあり、無理矢理出張して現地へ向かった。勤務地の秋田市から鹿角市までは150kmほどの距離。車で3時間かかるので、日没時間から逆算して職場を出発した。これが良くなかった。余裕の無い運転が、国道への合流車線にある一時停止標識の見落としを招いた。そして草陰にはパトカーが。まんまと捕まってし



▲世界遺産登録推進シンポジウムのポスターに使った日没の写真

まった。急いでいるのになんてことだ。パトカー内で焦る気持ちを必死に抑えた。その後何とか日没前に遺跡に到着。捕まってまで来た甲斐があった。雲の多い空模様だったが、陽の沈む山の端だけ雲が切れ、真っ赤な太陽を見ることができた。大湯の神様は夕日を見ることを許してくれたんだな。そんなことを思いながら大量の写真を撮った。平成22年のことである。

もう一つは、今年の10月4・5日に開催した、JOMON ARTフェスタ。今年度秋田県では、国民文化祭が開かれた。この関連事業で、大湯を舞台に踊りや演奏、小林達雄先生の講演や、アーティストとの対談などをJOMON ARTフェスタとして実施した。外でのイベントは天気が心配どころだが、不安は的中し、これから始まるという時に雨が降り出した。やむなく最初の小林先生の講演は、ガイダンス施設である大湯ストーンサークル館の中で行うこととなった。講演が終わる頃雨が止み、続く地元中学生による遺跡ガイドや桜月流御剣道の神谷美保子氏による剣舞、県内在住の演奏家による民俗楽器の演奏などが予定通り行われた。ほっと胸をなで下ろした

のもつかの間、今度は風が止まない。イベントの目玉の一つに、環状列石をキャンドルで照らすというものがあり、夕方には着火作業を始めた。しかしこれが、折からの強風で点けた先から消えていく。このキャンドルは事前イベントで、県内各地の一般の方々に協力してもらい、約2千個用意したもの。「当日は是非見に来て下さいね」と、作ってくれた方々に言った手前、点かないのはシャレにならない。点火係全員が必死に着火マスを連打し、指の間接がおかしくなった頃、時間としては18:00を過ぎた頃だったろうか、徐々に風が止み一気に着火作業が進んだ。おかげで、環状列石を縁取る灯火のラインがきれいに出来上がった。訪れた方々からも、とても良い評価を頂いた。



▲JOMON ARTフェスタのキャンドル点火状況

後から考えると、イベントが始まる直前までは、黒い雨雲の塊とわずかな晴れ間が交互に訪れる不安定な空模様だったが、小林先生の講演で雨が止み、神谷氏の舞で風が止んだ形になった。こじつけと思われるかもしれないが、精神的に追い込まれていたイベント事務局としては、神がかり的と思えるほどだった。個人的には、この地に眠る先人達が、大湯の話や環状列石を舞台とした踊りや演奏に満足し、キャンドルに火を灯すのを許してくれた、もしくは劇的に演出してくれたと思っている。大湯の性格は、墓域・祭祀域・集落など、研究者により様々な説が出されており、今のところ統一見解は得られていない。しかし、間違いなく縄文後期前葉～中葉の墓がある。そしてそこには遠い先祖が眠っている。また、興味深い説に環状列石を舞台とする考えがある。もしかすると、数千年ぶりに環状列石を舞台として大がかりなマツリを開いたことに、ご先祖様達が喜んでくれた結果、自然の舞台装置を操作してくれたのかもしれない、などと妄想しているところである。いずれにしろ、私にとって大湯は、ここ一番の時に期待を裏切らない遺跡となった。

大湯の調査成果は、これまでに遺構編と遺物編がとりまとめて刊行されているが、鹿角市教育委員会では平成27年度に総括編の刊行を予定している。また、平成27年度末には、平成10年から続いた整備事業も一段落する。少し先になるが、環境の整った大湯を是非ご覧いただきたい。なお車でお越しの際には、一時停止にご注意を。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは榎本剛治さんです。

## 考古学者の書棚

## 「洞窟の骨」

アーロン・エルギンズ著／ハヤカワ書房(2000)

高橋 一夫

エイブのインチキ関連の法則：

「同じ場所、同じ時、同じ人たちに異常な、あるいは不審な出来事がいくつも起きたら、その出来事の間には関連が存在する確率が高い」

小説の舞台は壁画があるラスコー洞窟で有名なフランスのドルドーニュ県。この地域には旧石器時代の洞窟が多くあり、先史文化研究所は継続して発掘をしていた。

ある家の裏から骨が発見される。事件の発端である。犬が洞窟から骨をくわえてきて埋めたもので、人骨と判明。その洞窟を探し当てると、旧石器時代の洞窟だった。警察はアメリカの人類学者のオリヴァーに骨の調査を依頼する。オリヴァーの鑑定により事態は急転。人骨は旧石器時代のもではなく、死後数年のものと判明。さらに、オリヴァーは以前に先史文化研究所で捏造事件が起きていたことを知る。

この事件はタヤックのインチキ事件と呼ばれている。先史文化研究所がネアンデルタール人時代のタヤック遺跡を調査し、人骨と数個の石器を発見したのだが、所長のカーペンターはもっと遺物があるはずだと一人で調査を続け、新たにホリアオオヤマネコの骨に4個の孔が空けられている遺物を発見する。この骨には孔が空けられていることから、プレスレットとして使用されたものが副葬されたと考えられた。研究所ではネアンデルタール人がホモサピエンスの遠縁か否かで論争していたが、装飾品の出土によりネアンデルタール人をホモサピエンスの仲間と分類することができるので、この発見は所長の説を有利に導く物証となった。しかし、1か月後のパリの新聞に、その骨は古生物博物館から盗まれ、その後孔が空けられて洞窟に置かれたものだ、という匿名の手紙が掲載された。調査の結果、新聞のとおり骨は古かったが、孔は金属ドリルで開けられたものだった。所長の実績からすれば簡単に偽物と見抜けるものだったが、副葬品の発見で高まるであろう名声に目が曇ってしまったのである。

この時点で警察は、カーペンターを恨んでいた研究所の臨時雇いのブスケが偽物を作って埋め、それを知ったカーペンターは罠にはめられたと怒ってブスケを殺害し洞窟に埋めたと考えていた。人類学者のオリヴァーは、冒頭に掲げた恩師のエイブが唱えたインチキ関連の法則に基づき事件を推理する。そうした中、新所長になったボーピエールは中期旧石器時代のハンドアックスで後頭部を殴られて死亡する。

先を急ごう。犯人は研究所員で考古学会の大物のモンフォールだった。殺人の動機は、弟子のカーペンターを後継者として目をかけて育ててきたが、研究では弟子が注目を浴びようになり、所長候補にも彼の名が挙がった。モンフォールは所長職に野心はなかったが、弟子が所長になることはいたたまれなかった。そこで、偽造した骨を洞窟に埋め、カーペンターに発見させる細工をした。もくろみ通りカーペンターは骨を発掘し、偽物と見抜けなかったので失脚する。モンフォールはカーペンターに偽造を問い詰められたため殺害し、遺体を洞窟に埋め

た。その現場をブスケに見られてしまい、それをネタにゆずられたので彼も殺害。問題の骨はボーピエールに盗ませたのだが、暴露されるのを恐れハンドアックスで殺害したのである。事件の発端となった犬が洞窟からくわえてきた骨は、カーペンターの骨だったのである。

殺人事件ではないが、日本でも「同じ場所、同じ時、同じ人たちに異常な、あるいは不審な出来事がいくつも起きた」。前期旧石器事件である。この事件ではインチキ関連の法則はプラスに働いてしまった。つまり、同じ人（藤村新一）だけが石器を発見するので、藤村には旧石器時代の地形が見える、特殊な眼力により土の相違が見える、という話がまことしやかに広まった。こうした特殊能力のある藤村が発見・発掘したのだから、一連の現象は信頼できると思い込んでしまったのである。藤村がいない時には石器が出土しない、石器は型式学的におかしい、という不審な現象もあったが、次から次へと遺跡の年代は古くなることに目を奪われ、石器を観る目を失ってしまった。そうした状況にあっても、目が曇らず捏造・インチキを見抜いた研究者もいた。角張淳一と竹岡俊樹がその代表である（上原善広『石の虚塔』新潮社2014）。だが、学会は彼らの指摘を受け入れなかった。

「考古学者は、発掘の成果を報告することが遅いことにかけて悪名が高い。多くの報告書は文書にされず、文書にされた多くのものも決して出版されることはない」といわれている（『レンブラント』でダーツ遊びとは』ジョセフ・L・サックス 岩波書店2001）。確かに、藤村が関係した遺跡の報告書が刊行されており、調査資料が発掘者たちの私的資料から公の資料として研究者間で情報が共有されていれば、捏造・インチキは防止できたに違いない。

捏造発覚後、日本考古学協会と関連自治体は検証作業に入ったが、すべて捏造と判明した。自分が関係した遺跡は例外と期待をもっていった人もいたようだが、インチキ関連の法則に照らせば当然の帰結である。前期旧石器事件の動機は小説とは相違し今もって不明だが、捏造事件は藤村一人の責任ではなく、それを許してしまった学会の責任でもある。前期旧石器を支持した研究者の中には、捏造発覚後に自己批判することなく身をかかわした者もいた。変わり身の早い研究者を見極める方法もインチキ関連の法則に加えたいものである。

なお、前期旧石器事件の発覚は2000年11月5日、本書の刊行は1か月後の12月10日である。奇縁である。早く捏造を見破れと訴えていたのだろう。

## アルカ通信 No.136

発行日 2015年1月1日  
 企画 角張淳一(故人)  
 発行所 考古学研究所(株)アルカ  
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
 TEL 0267-25-0299  
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp